

衣服はその材料の性質上早く腐敗し易いので具体的にはわかりにくい。ただ、西唐津海底遺跡その他から、骨製の針が発見されることや、撚った糸が土器の文様をつける道具として早くから用いられていたことなどから、樹皮や獣魚皮を縫い合わせた衣類や編物のような衣服があったらうと推測されている。ただ、この時代も晩期になれば、土器に布目をおさえつけたあとが発見されたことから、織物があったことは確かである。

装身具は豊富に用いたようで、貝を細工した腕輪(貝輪)、動物の歯、骨、あるいは硬玉、軟玉等の美しい石を円や平たく加工して紐を通し、首飾り、耳飾り、髪飾り等にした。県内でも数種の装身具が発見されている。

(5) 縄文のころの人

この時代の洞穴や貝塚等から発見された人骨を調査研究している学者達は縄文人をおよそ次のように想定している。

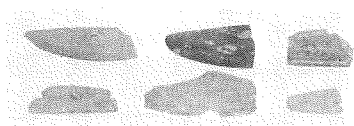
このころの人々は洪積世時代の人々より身長がやや高くなり、一五七—一六〇センチぐらいで、頭は比較的大きくいわば「頭でっかち」であった。顔の幅が広く、長さは短かく、ほほ骨が横に張り出していた。又当時の人の顔を特に特長づけるのは、眉間から眉のふちにかけて強く突き出ており、反対に鼻のつけねはひどく引つ込んでいる。鼻は高く鼻すじが通り、歯は今の我々と違って、上下の歯が爪切りの刃のように合っているので、ひどく受け口に見えたのではないかといわれている。

縄文時代の終わりがつまり三千年くらい前は、男女共に十六、七才になると、前歯の何本かを抜く習慣があり、抜歯することによって成人になったしるしにしたという。抜歯といっても、石のようなすりを使い、長時間をかけてすりへらしていくもので、途中未完成のまま死ぬ人もあった。平均寿命は三十才ぐらいで比較的短命であったと考えられる。又関東地方特有の土偶(粘土で作って焼き上げた人像)の顔面に残る点列などから推測すれば「入れ墨」が行われていたのではないかといわれている。入れ墨は三世紀半ばごろになると中国の魏志倭人伝に記されているとおりだが、この時代にはすでに一部の地方で始められていたかも知れない。

以上縄文時代の生活の概略を述べたが、彼らの生活の中には時に野火、山火事、落雷等の恐ろしい自然の災禍もあった。それは集落遺跡発掘の中に火災によって滅びた住居跡の多いことがわかったからである。しかし幾年か経ってその焼跡に他の人々がやって来た時はすでに新しい豊かな沃野が待っていたことであろう。これが中期以降になると原始焼畑耕作へと発展したと思われる。そして更に時代が進むにつれ、狩猟や魚撈の道具も発達して、人々は次第に山麓や丘陵から海浜、沼地、河岸等の低地へおりていって住むようになってはななかりうか。

五、弥生時代

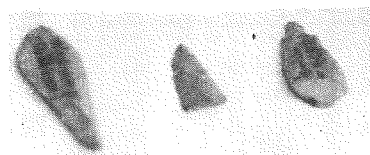
参 考 いずれも県内の出土品 (祐徳博物館蔵)



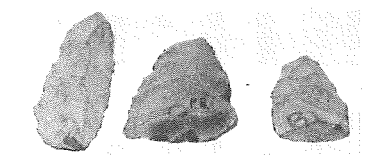
石包丁 (弥生)



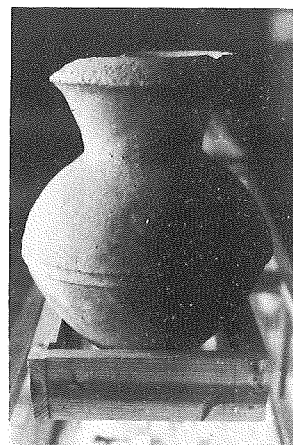
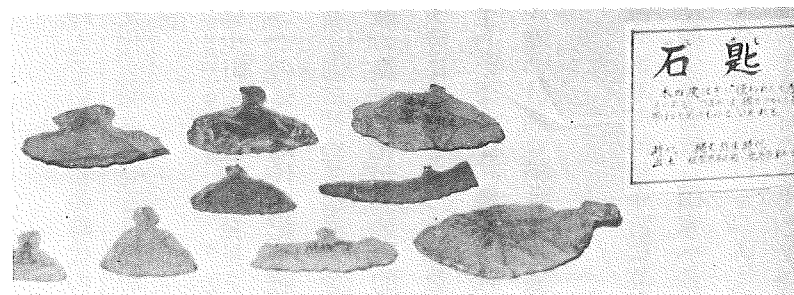
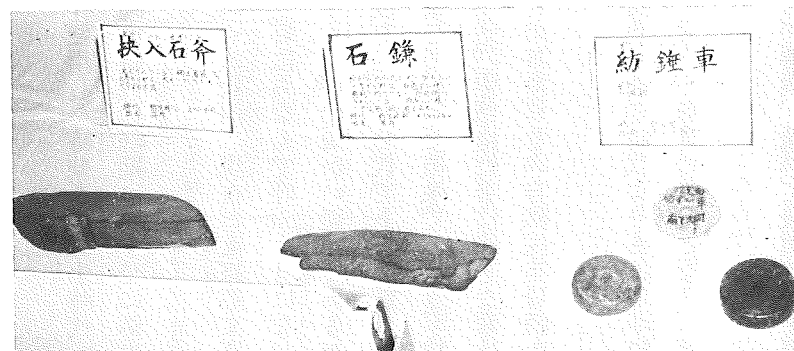
石斧 (縄文)



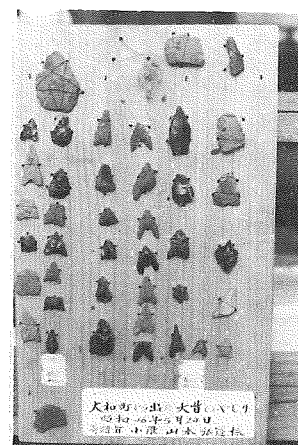
石槍 (縄文)



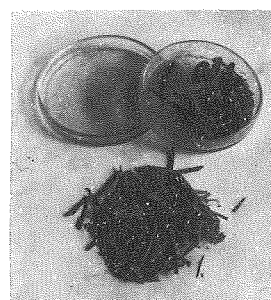
尖頭器 (先縄文)



弥生式土器 (川上小蔵)



大昔のやじり (川上小蔵)



久留間遺跡出土の木片と木の实 (川上小蔵)



久留間遺跡からの出土品 (川上小蔵)

したアラカシ (県博物館)
3000年前の实から芽を出



埴輪 (今山、野田山古墳群出土)

概 説

縄文時代に続いて、弥生式土器を製作使用した時期を「弥生時代」と呼んでいる。この時代の人々の大半は縄文時代の人々の子孫であり、縄文時代の晩期にはすでに弥生式文化を発達させる足場ができていたのではないだろうか。

弥生式土器というのは、明治十七年（一八八四）現在の東京都文京区弥生町で、最初に発見されたもので、これと同系統の土器を発見地弥生町にちなんで呼ぶようになった。この弥生時代は紀元前三世紀から紀元三世紀ごろまでのおよそ六百年くらい短い期間であるが、我が国に初めて農耕と金属が伝わり、いわゆる弥生式文化が急速に発展を遂げた時代である。これは大陸の農耕文化が、地理的条件のよい北九州に渡来し、次第に東方へ普及していった結果であろう。特に大陸に源流をもつ水稲農耕の発展、機織・支石墓等の新しい文化の芽生え、生活に社会に大きな変化を生じたことが、縄文時代と著しく異なる点であろう。稲作は前時代のその日ぐらしの自然採集経済から一種の計画経済へと進展せざるを得なくなったのである。

わが大和町においても、この時代の特色が前の時代よりもはるかに濃厚であり、沖積平野に立脚した農耕生活は、やがて富の蓄積から豪族の発生、職業の分化となり、部族小国家から統一国家への出現となっていくのである。

大陸では中国の前漢が亡び、王莽の新的時代、続いて後漢時代を経てやがて三国の時代となった。又

半島では馬韓、弁韓、辰韓の三国に代って新羅、任那、百濟、高句麗という新興国ができて我が国と接するようになった。このころが我が国の建国胎動期であるが、四世紀になると中国の輯安にある好太王の碑（高句麗の長寿王が四一四年に先帝の好太王の功業を記念するために建てた石碑）に、すでに倭（日本）は今の平壤辺りまで攻めていると刻んでおり、どうやらそれ以前に日本は国家統一ができていたようである。

弥生時代の年代については、各地の弥生式遺跡から土器と共に出土する製作年代が明確な大陸製の銅鏡や貨泉（宝永通宝のように中央に方形の穴のある円形の銭で、穴をはさんで右から貨泉と鑄出してある中国鑄造の貨幣）等によって、次のように区分しており、その主な事柄を挙げると、

前期（紀元前三〇〇—同一〇〇年）	中期（紀元前一〇〇—紀元一〇〇年）	後期（紀元一〇〇—同一三〇〇年）
西日本に稲作が広まる。 木製の農具を使用する。 弥生式土器を作る。 石器が主に使用される。 織物の製作が盛んになる。	弥生式土器が東北地方南部まで普及する。 北九州の特定の甕棺（かめかん）に中国製の銅鏡・銅剣などが副葬される。 鉄器も少し使われた。 近畿地方を中心に銅鐔（どうたたく）が現われる。	登呂（とろ）のような大規模な灌漑が行われる。 石器はほとんどなくなり鉄器が普及した。 近畿を中心に大型銅鐔が栄える。
中部地方以北はまだ縄文時代。	このころ百余国に分かれていた（前漢書） 57侯の奴国王が後漢に朝貢して金印を受ける（後漢書）	107倭国王師升らが生口百六十八人を後漢に献上する（後漢書） 170-180この間に倭国に大乱がある。女王卑弥呼の出現（魏志倭人伝） 239卑弥呼が帯方郡に使いをやり、魏に朝貢する。（同前） 248卑弥呼が死ぬ。壹与が女王となる（同前）

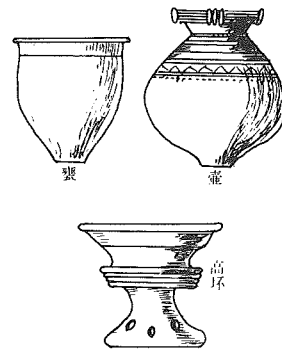
〔井上光貞編「日本の歴史と年表より」〕

のとおりである。

1、弥生式土器と大和町

(1) 弥生式土器

弥生式土器は縄文式と同様に素焼であるが、一般的特徴は色調の明るい赤褐色や淡褐色のものが多く、原料の粘土も精選されたものが多い。製作技術の進歩によって、土器の厚さが平均しており、形の大きくなり薄手でひずみが少ない。器の形も文様も縄文土器の多種多様な変化に比べて単純であるが、どの土器も左右相称の均整美が備わっている。文様は無いものが多く、あっても櫛目、刷毛目、その他刻線を施す程度のものである。弥生式土器はものを貯える壺、ものを煮る甕、ものを盛る高坏の三種類が基本形態となっている。その他土器をのせる器台や食器としての鉢や皿あるいは甑もある。弥生式土器も時間的、地方的に器形や文様にそれぞれ変化が見られるので、縄文式土器と同様に遺跡の層位的検討の結果と、土器の形式変化等によって型式をきめているが、北部九州の編年は次のとおりである。



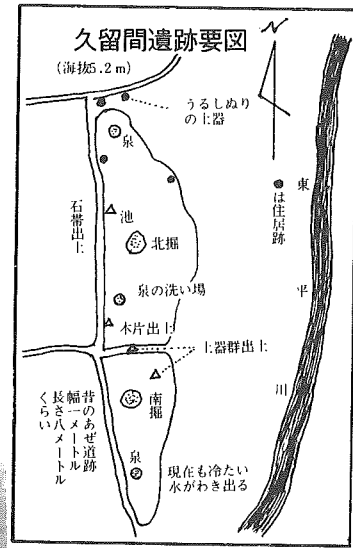
- 前期 板付式土器〔板付Ⅰ式↓板付Ⅱ式↓亀ノ甲式〕
- 中期 須玖式土器〔城ノ越(須玖Ⅰ式)↓須玖式(須玖Ⅱ式)〕
- 後期 高三瀬式土器〔伊佐座式↓下大隈式土器↓西新町式土器〕

(2) 大和町における弥生時代の出土品

遺跡	出土品	要
野口	埴(つぼ)	野口の住居跡と推定される所から出土したもので、前期の遼賀(おんが)川式土器である。北九州の弥生式は文様がないが、この式のもの文様があるのが特徴であり、弥生式土器の祖原型といわれている。
尼寺南小路	支石墓 石合口 人合口 骨合口	昭和四十九年(一九七四)二月、金崎氏の宅地内から支石墓が発見された。県教育庁文化課の木下之治文化財調査官が調査に当たられたが、支石墓の上石は長径三・二メートルの楕円形で、厚さ四十五センチ前後の扁平な花崗岩(かこうがん)で、このような巨石を用いた支石墓は他に例がないと言われている。下石は南西隅と北辺中央部の二ヶ所に設けられ、他は確認されていない。上石の中央よりやや南にかたよって褐色砂質の基盤層に土堀(どご)を設けて、約二十五度のかたむきで一組の合口甕棺(あわせぐちかめかん)が埋められていた。甕の長さはいずれも八十センチのほぼ同じ大きさのものと推定され、型式は前期末の板付Ⅱ式又は下伊田式あたりと考えられ、内部に遺体の一部が残存していることが確認された。副葬品の有無については不明である。
佐賀コロニー	合口甕棺、箱式 石棺、鉄片	中期の須玖式の合口甕棺と粘土ばりした箱式石棺の中から鉄片が発見されている。
上戸田岡地	甕	合口甕棺は二回ほど発見されており、弥生時代における集団墓地ではなかったかと推定される。
今山八幡籠	合口甕棺、箱式 石棺、人骨	後期の釣川式の小さな甕である。
都渡城高島	土器	前期の金海式と呼ばれる口縁部に刻目のある合口甕棺と一部破壊されていたが、長さ百四十五センチ、幅四十七センチの箱式石棺の中から少量の人骨が発見されている。
小隈	石甕 甕 丁	高三瀬式土器である。
その他	合口甕棺外	石鎌(いしがま)と同様農耕具として使用した。

久留間遺跡

出土品Ⅱ石器類、土器類、種子類等



この遺跡は「久留間カミ塚弥生式遺跡」という。「カミ塚」というのは、弥生式土器のカメなどがたくさん出たことから土地の人が「カメ塚」を「カミ塚」に転化しただろうといわれている。

大和町で学術的発掘調査をされた最初の遺跡である。

昭和二十四年ジュディス台風によって、東平川の堤防が決壊しようとしたので、それを補強しようとして、耕地

地から土を掘り起こした時、多数の土器が出土したこと

に端を発し、昭和二十五年(一九五〇)九州総合文化研究所が中心になっ

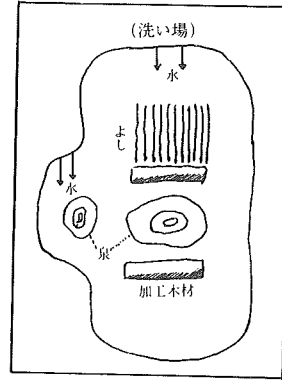
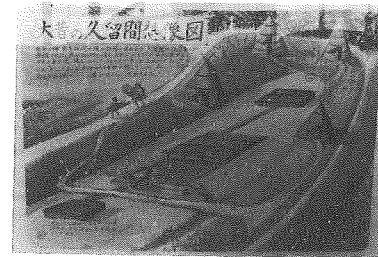
て調査した。

遺跡の推定面積は約六千五百平方メートルで、調査したのはそのごく一部である。四つの住居跡の断面が確認され

(未確認一)、竪穴住居が主であるよう

だが、発掘されていないので住居の形

大久保豊 絵



態や構造は明らかでない。

又泉と一・七五メートルの隅丸方形の「洗い場」が発見され、洗い場からは、木わくか土止めに使われたと見られる木材と足場に当たる所には葦が敷きつめられていた。遺物の中で、石器としてはサヌカイトの打製の柳葉(やなぎば)式の石鏃や石庖丁、磨石(すりいし)、凹石(くぼみいし)等が出土しているがその数は少ない。

土器は中期の須玖式も若干あるが、後期の高三瀨式が中心で壺、高坏(たかつき)、浅鉢、甑(こしき)、器台等が著しく多数出土しているのが注目され、ロクロを使った土器もあるので、窯跡(かまあと)ではないかという説もあるが、これは今後の発掘調査を待つより外にない。

植物の種実としては、もみながら、瓜の種、そば等の栽培植物の種子が検出され、そのほか山グミ、シイ、クリ、ドングリ、アカガシ、白ダモ(くすのき科)レンゲ等の種子が出土している。

2、水稲耕作

縄文時代の(2)「食料」の所で、その晩期にコメ作りが始められたことに触れたが、弥生時代になると前期の時代から明確に水稲耕作が始められた。日本人の主食である米は紀元前三世紀ごろから北九州に始まり、極めて短期間に東北地方まで栽培されるようになった。

稲は、日本には野生種はなく(原産地Ⅱ熱帯・亜熱帯)、栽培稲の原産地が東南アジアであることはほぼ間違いないところで、中国中部を経て日本へ伝わったことは確実であるが、中国から直接日本へ伝

えられたものでなく、南朝鮮を経由して伝えられたものであろうと言われている。

※水稲耕作を物語るものとして、久留間遺跡出土の「もみ」が挙げられるが、もみの痕（あと）のある弥生式土器が、佐賀市成章中学校や、神埼郡千代田町詫田（たたくた）貝塚遺跡などから発見され、又焼けた米のつまった貯蔵穴（弥生時代の竪穴式）が、鳥栖市田代梅坂から発見されている。中でも昭和四十六年（一九七二）と翌四十七年の二回にわたって発掘調査された三日月町土生（はぶ）遺跡は城ノ越式や須玖式土器を出土する弥生時代中期の遺跡で、焼け米を始め、石庖丁、木製の平鍬（ひらぐわ）、二本又は、三本の齒のあるまた鍬、鋤（すき）、竪杵（たてぎね）などが、竪穴式住居跡と共に発見され、当時の水稲耕作の実態を示し、かの静岡市の登呂（とろ）遺跡に比すべき農耕集落遺跡として注目され、昭和四十八年六月、国の史跡に指定された。

弥生時代は水稲耕作を中心としながらも狩猟・漁撈や食用植物の採取が副次的なものとして行われたことは、久留間遺跡出土の石鏃・磨石・凹石等の石器や、山グミ、シイ、ドングリ、クリなど、又佐賀平野内部や唐津湾沿岸平野の周辺部の弥生時代の貝塚から発見される貝殻や魚・鳥獣の骨などによってわかるのである。この水稲耕作によって従来顧みられなかった低地が水田として開拓され、住居も山麓・丘陵地帯から次第に低地へ移動していったのである。

3、金属器

弥生時代の一つの特色として、青銅器や鉄器等の金属器の使用が挙げられるが、なお、縄文時代に引き続きして石器も金属器と共に使用されたので、弥生時代を「金石併用時代」ともいいう。

※中国では、日本の縄文時代の後期に当たる紀元前千五百年ころ、最初の統一国家である殷（いん）の時代に青銅器の使用が始まり、ついで周

の時代を経て、紀元前八世紀ころからの春秋・戦国時代には鉄器が出現し、紀元前三―一世紀の前漢時代には鉄器の使用が普及した。前漢の武帝は紀元前八八年に北朝鮮を支配し、楽浪郡（らくろうぐん）を始め四つの郡を置いたが、これによって漢の文化は直接朝鮮に移植された。これらの金属器はこのように中国から朝鮮を経て我が国にもたらされたものである。

種類	摘	要	大和町関係
鉄器	鉄器は従来、発見例が少ないことなどからして、青銅器より遅れて伝えられたようにいわれていたが、弥生時代の当初から使用されたことは、熊本県玉名郡天水町の齊藤山（さいとうやま）貝塚から鉄斧（てつこ）が、又鹿児島県日置郡金峰町高橋貝塚から括（もり）か刀子（とうす）（短刀）の茎（なか）から二刀のつかに入れる部分）らしい鉄片がいずれも前期の板付式土器と共に発見されていることかわかる。鉄器は工具や武器などの実用的な利器として使用されたが、青銅器に比べてその出土例が少ないのは腐食しやすいからである。	佐賀コロニーの箱式石棺内から鉄片が出土し、久留間遺跡から出土した木材は、鉄器とは断定できないが金属器で加工された跡が見られる。	
青銅器	青銅器としては銅劍・銅鉞（とうけん・とうげん）（銅戈（とうか）・銅鐔（とうてん））銅鏡などがあげられる。この中で銅劍・銅鉞・銅戈は北九州を中心に銅鐔は近畿地方中心に分布している。大陸から輸入された銅劍・銅鉞・銅戈は細形で刃先の鋭い実用的なものであるが国内で生産されたものは刃先の鋭い非実用的であるのが特色である。青銅器は鉄器のように利器として用いられたのではなく支配者の権威の象徴として、又祭具や宝器として用いられたものと考えられる。なお、この広形銅戈を製造（ちゆうぞう）するための砂岩製の鑄型（いがた）が佐賀市久保泉町磯ノ木（いこのき）から出土している。	尼寺南小路出土の広形銅戈は、本来は基部に直角に柄（え）をつけて使用するるとび口のようなひっかく武器で、かつてクリス形銅劍と呼ばれたこともあるが、国産品で銅質も悪く、実用的でない。	

4、石器と木器

石器は縄文時代に続いて、打製のものも見られるが磨製のものも多くなり、農具や工具として使用され、又金属製の利器を模造した石劍や石戈などがあるが、金属器の普及によって次第に使用されなくなった。大陸系の石器としては石庖丁・太形蛤 刃石斧・抉入石斧・扁平片刃石斧などがある。

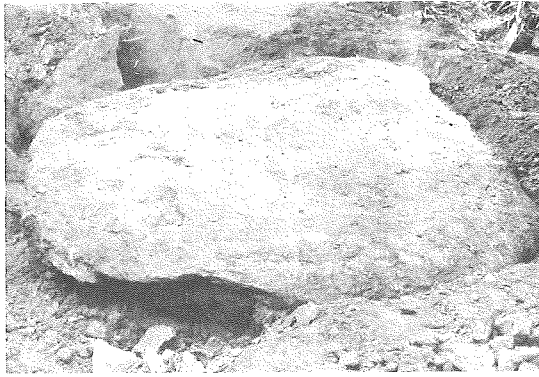
鉄製工具の出現によって、木器の加工や製作が盛んとなり、農耕具の主要なものが木製品であったことは、三日月町土生遺跡の出土品からも知られるが、大和町では、木製品の出土こそないが、久留間遺

跡は低湿地であることから木器の出土が期待される。

種類	摘要	大和町関係
石庖丁	これは櫛の穂をつみとる道具で、形は半月形や長方形の磨製石器で、中央の背の近くに二つの小さい孔(あな)があってこれにひもを通して指にかけ使用したものである。背の反対側(あし)は、刃には外湾形・内湾形・直線形などがあるが、県内では外湾形のものが多い出土している。	久留間遺跡、小隈等から出土
大形蛤刃石斧	楕円形の断面をもつ大きな棒状の石斧で、刃と平行して柄(え)をつけ、全体の重みによる衝撃(しうげき)を利用して、打ち切り、打ち割る磨製石器である。	礫石・水上から出土
挟入石斧	方形又は台形の断面をもつ柱状の磨製石斧で、一端を片側から四十五度ぐらいの角度で切り落して刃を作り、その反対側には体の中ほどの部分にくぼみを作って柄をつける際のみ掛りとしているのが普通で、柄は刃と直角につき、木材をえぐるのに適し、大形の木製容器や舟などを作るのにつけて、今の手斧(ちような)の役をした石斧である。	
扁平片刃石斧	かんなの刃のような形をした幅広く、薄い片刃の磨製石斧で手斧やのみとして使用されたものである。	

5、墓制

これまでは死者の埋葬は極めて簡素であったが、弥生時代になると死者を丁重に葬るようになる。北九州を中心とする西日本では、大型の甕に死体を入れて葬った甕棺墓が多く、一個の甕に死体を入れて石や木の板などでふたをした石蓋甕棺や木蓋甕棺と甕又は壺などの口を合わせて死体を入れた合口甕棺があり、その他板石を箱形に組み合わせる中に死体を入れた箱式石棺墓、土を掘りくぼめて死体を葬った土掘墓、甕棺・組合せ箱式石棺などを埋めた上に、数個の支石を置いてその上に大きな石をのせた支石墓、土掘墓などの周囲を方形の溝で囲んだ方形周溝墓などがある。



支石墓 (尼寺南小路)

弥生時代の墓地は一般に集落からやや離れた丘陵等の比較的高く乾燥した場所に設けられた共同墓地が多いが、特に甕棺墓は一か所にたくさんかたまっていることが多い。三養基郡中原町の姫方遺跡では約四百、鳥栖市田代本町の天満宮東方遺跡では約九十が発見されている。

大和町では甕棺墓や箱式石棺墓が佐賀コローや今山八幡籠で発見されているが、これは恐らく共同墓地の一部と推定される。尼寺南小路で発見された支石墓は背振山地南麓で確認された最初のものである。このような支石墓は南朝鮮から北九州に伝わったもので、佐賀県ではこれまで唐津地方に多く発見されているが、尼寺のは浜玉町五反田支石墓や唐津市宇木瀬戸口支石墓に次ぐ時期

のものとされ、唐津市葉山尻支石墓よりも以前のものです。このような巨石を使用した例はないといわれている。この尼寺南小路の金崎純一氏宅地内の支石墓は標高十メートル余の平地で、国道二六三号線に接し住宅や商店街となっており、地形や地貌は相当に改変されているため判断としない。しかし付近一帯の地表観察によると、古墳時代の土師器片が相当散在し、弥生式土器片も若干出土していることから考えると、この地帯は弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡であることを示しているのではなか

ろうか。又地元の人が以前近くから甕棺が出土したことを伝え、居釜で箱式石棺墓を掘り当てたことも伝えているので、この遺跡付近に古墳群が所在していたのではないかと考えられる。大正八年(一九一九)に馬郡氏宅地内から広形銅戈が発見されたことは前述したが、この場所は支石墓と至近の場所であり、甕棺の中の副葬品ではなかったろうかとも考えられている。

弥生時代の墳墓は副葬品を伴わないものが多いが、ごくまれに銅鏡、銅剣、銅鉾、銅戈や鉄器、玉類等の貴重品を副葬しているものがある。それは死者の生前の富や地位を物語るもので、有力者の出現を示し、階級的社会の成立をほのめかすものであろう。大和町では佐賀コロニーの箱式石棺の鉄片が副葬品としては唯一の例であるが、この鉄片が武器であるか工具であるかははっきりしない。

6、集落と社会

(1) 山麓から平地へ

弥生時代の住居は縄文時代に続いて竪穴式住居や平地式住居が中心であった。しかし水稻耕作のために集落が低地に移り、より衛生的な高床式住居や、穀物貯蔵のための高床式の倉庫も造られるようになった。(このことは銅鐸に刻まれた絵や弥生式土器、家型の埴輪等から推定できる)。

水稻耕作のため、食料の獲得と保存が一段と容易になり、生活がより安定し、住居を転々と移動することは少なくなつたが、それと共に共同作業の必要から集落の規模も次第に大きくなつた。三日月町土生遺跡の規模は約五十戸前後の農耕集落ではないかと推定されている。久留間遺跡は前記したように

竪穴住居跡が発見されているが、ここでも泉を中心として、比較的大きな集落が営まれていたものと考えられる。縄文時代には顧みられなかつた湿潤な低地は灌漑技術の進んでいない当時においては最良の水田で、柔かい土壌は石器や木器を主とする農具による作業を容易にしたであらう。

(2) 大和町における集落

大和町における弥生時代の集落は出土品等から山麓の丘陵にもあつたと推定されるが、水稻耕作に便利な低地へ進出していったことを示すものとして、久留間遺跡があり、その外に尼寺南小路、佐賀コロニー、上戸田団地等にもあつたと推定される。嘉瀬川上流に当たる当町では、その氾濫の危険性に絶えずさらされたので、尼寺当たりの標高十メートル程度の低段丘地帯は当時は一番適当な居住地ではなかつたろうか。水稻耕作によって集落の規模は大きくなり、土地や灌漑用水の管理と利用などから、共同作業をする機会が多くなると、そこに指導者が必要になつてくる。この指導者は村を支配すると共に、農耕生活の安定を祈つた稲霊祭りを司どる人でもあつたと考えられる。指導者ないしは有力者がいたということは前にも触れたように、墳墓に見られる副葬品からわかる。

大和町ではこのような副葬品を持つ墳墓は発見されていないが、前記の尼寺の支石墓や広形銅戈は、有力者ないし司祭者の性格を持った首長らしい者がいたのではないだろうか。この支石墓は他に例を見ない巨石で、これを動かすには相当数の人手を要したことであらう。この石は恐らく尼寺から二キロ以上も離れた背振山地南麓から運ばれたものであろうと考えられている。

(3) 弥生時代のころの人

このころの人々は縄文時代の人と大分違ってきている。身長も伸びて平均百六十センチくらいになつたという。一般に丸顔であるが、縄文のころと違って、眉間から眉にかけての隆起は低く、特に著しい違いは鼻が低いことである。そのため顔はのっぺりした感じであつたろうと言われている。しかし、歯のかみ合わせは縄文人と同じで矢張り毛抜きのように合わさっていたようである。両者の違いは人種が違ふのではなく、徐々に変化してきたものと思われる。抜歯も縄文時代と同様に行われていたことは呼子町の大友遺跡から出土した遺骨にも見られる通りで、弥生後期になつてこの風習も次第に薄れていったようである。寿命はやはり短命で殊に女が男よりも短かつたと推測されている。

又水稲耕作のための開田、耕作、整地のような力仕事、耕作道具の製作や住居、倉庫の建造等は自然男の仕事となり、一族や近隣同志の協力でやつたろうし、女は老人や子供の手を借り水稲の管理や収穫、米搗き、薪集め、水汲み、裁縫、土器作り、食料採集とかり立てられたことであろう。

7 原始的小国家の分立と郷土

(1) 弥生時代の国内事情

このころの記録は日本にはもち論ないが、中国の歴史書で日本について記されている最古のものは、一世紀に書かれた「漢書」である。その地理志に

「それ楽浪（今の平壤付近）の海中に倭人（日本人）あり、分れて百余国となる。歳時を以て来り

献見す……。」（以上訳文）

とある。この歴史書はまだ日本に文字がなかった時代のものである。漢が北朝鮮に楽浪郡を置いた紀元前後（弥生時代）のころ、日本は多くの国々に分かれて楽浪郡の役所に毎年定期的に通貢していた国もあつたと記されている。

又五世紀に書かれた「後漢書」の東夷伝には、

「建武中二年（五七）倭奴国 貢を奉じて朝貢

す 使人自ら大夫と称す 倭国の極南界なり

光武賜うに印綬を以てす」（以上訳文）

と記されている。つまり紀元五七年に、北九州の奴国が後漢の都洛陽に使を出し、後漢の光武帝から印綬を賜った。又紀元一〇七年に倭国王帥升らが生口（どれい）百六十人を献上し拜謁を願つたと記されている。印綬というのは奇しくも天明四年（一七八四）二月、百姓甚兵衛が博多湾の志



新しい収穫の喜び（読売新聞社発行「日本の歴史」第1巻より転載）

賀島叶の崎で、田の溝を改修中発見した「漢委奴国王」の五文字を刻んだ金印で、この発見により「後漢書」の記事の正当性が証明された。(これには異論のある学者もある)

又生口を献上した帥升は倭国王とあるが、唐代の「通典」には「倭面土地王帥升等」と記しており、北宋版の「通典」には「倭面土国」となっている。こういうことから学者の間では倭の面土国であろうとし、面土国は「回土国」のことで後の「伊都国」とする者や、面土の古音を検討して、面土を「メズラ」と読み、糸島半島の西にある東松浦半島あたりの末盧国とする者もある。日本書紀ではこの地方を「梅豆羅」といっており音がよく似ているからである。いずれにしてもはっきりしないが、ただ小国家が分立していたことは確かである。これらの原始的小国家は筑前国とか肥前国とかではなく、奴国は筑前国那珂郡、伊都国は同怡土郡、末盧国は肥前国松浦郡で、大体今日の郡に近いものであったと考えられる。このような原始的の小国家は、単独であるいは連合して、朝貢という形式で使節を大陸にやり、かの地からすぐれた文化の摂取にとめたのである。

更にこのことを立証するものとして「魏志倭人伝」が挙げられる。

(2) 魏志倭人伝について

魏志倭人伝というのとは三世紀に書かれたもので、魏、呉、蜀の三国が並び立っていた三国時代の中国の歴史書である。正しくは「三国志」の中の「魏志」の「東夷伝」の「倭人条」という所に邪馬台国の事が記されている。この魏志倭人伝は弥生後期の日本の歴史・地理・風俗などを二千字にわたって記し



魏志倭人伝の一部

ている。この二千字の内容を大別すれば、先ず三十に及ぶ倭人の国々への距離や戸数、次に衣食住や習俗、最後にこれらの国々を統合した女王国の政治・外交という順序になっている。国々についてはまだ結着がなく、邪馬台国が近畿にある説と九州にある説があり、いわゆる「邪馬台国論争」は今なお続いている。

※魏志倭人伝より一部の主要抜粋

○邪馬台国

対島(つしま)、一支(いき)、末盧(まつら)、伊都(いと)、奴(な)、投馬(つま)等の三十国が邪馬台国によって統括された連邦国家的な性格を持っていたようである。

邪馬台国には卑弥呼(ひみこ)又はひめこが女王として統治していた。この三十国以外に邪馬台国に統治されない狗奴国(くなく)があり、東は海をへだててやはり別の国があった。これら三十余の国々には官職的な名を持った人もいたし、伊都国には邪馬台国の出先機関が設けられていた。国々には市(いち)もあり租賦(そふ)が

税)が取められ、尊卑の別もあった。盗みもなく、争いもなく、法を犯した時は軽いものはその妻子が没せられ、重いものはその門戸及び宗族が亡ぼされる等かなりの厳正な組織を持っていた。また、邪馬台国は戸数七万余戸もあったという。

○衣服・容貌等

男子はみな結髪し布で頭を巻いている。衣は幅の広い布を縫い合わせず身体に巻きつけるようにして着ている。婦人は単被(ワンピースのような)を袋のようにして頭の出る所だけ穴をあけてそこから頭を出して着ている。男女ともはだしである。婦人の髪型は頭の中央から左右に分けて髪を束ねている。男子は青みがかった黒色の文身(いれずみ)をしている。身体にいれずみをするのは、水中の大魚や水禽(水鳥、鯨?)から身を守るためだったが、後には飾りの意味も加わってきた。いれずみは諸国それぞれ異なり、それをする場所、大小、尊卑の差などがある。

○生活

夏冬共生菜を食べる。屋室があつて、父母兄弟は寢室が異なり一夫多妻である。身体には朱丹を塗り、食事には高坏(たかつき)を用い、手づかみで食べる。酒をたしなむ。

○生業

好んで水中にもぐり魚や蛤(はまぐり)を捕える。禾稻(かとう)・紵麻(ちよま)からむし)を植え、蚕から絹糸をつむいだり、麻の細糸や絹織物や木綿物を作ったりしている。(木綿がこのころ日本にあつたかは不明でコウゾの皮などで織つたものか?)

○産物・武器

真珠、青玉、丹等を産する。武器としては矛(ほこ)、楯(たて)、木弓を用いる。木弓は握りの下が短く上が長い。竹箭(たけや)には鉄鏃(てつぞく)や骨鏃を用いる。

○慣習

貴人と道路であえばためらいながら草むらに入る。貴人からものを言われたり、その言葉を相手に通じる時も、常にうづくまるか、ひざまずくかして、両手を地につけ、恭敬の姿勢をとり「わかりました」という答えには「あい」という。死体は棺に納めるが中国のような槨(かく)棺を入れる室)を作らない。棺を地中

に埋め小山のように盛土して墓を築く。死者の家では十日余り喪(も)に服し、この間は魚肉も獣肉も食べない。喪主は大声で泣き哀悼の意を表わすが、他人はその家に行つて酒を飲んでごちそうになり、歌つたり踊つたりする。埋葬が終われば家族は水中でみそぎをして死のけがれを払う。骨を焼いて吉凶を占う。倭人の寿命は八、九十才から百才ぐらいで、貴人は四、五婦、普通人でも二、三婦の妻帯をする。婦人は不貞行為もなく、またしつともしない。

ところで、この邪馬台国がその後どのような推移をたどつたか明らかでなく、大陸の文献に日本が再び登場してくるのは四世紀のところで、それまでの約百年間は「謎の世紀」といわれているが、この間にも国々の統合が進められていたことは間違いない。

佐賀県内で弥生時代にはどんな原始的小国家が存在していたかについて、「魏志倭人伝」ではほぼ確実と言えるのは、唐津地方の「末盧国」のみであるが、背振山地の南部やその外にも当然存在したと考えられる。三世紀前半、すなわち弥生時代末期に成立していた「国」が、五世紀の「国」につながり、又原始的小国家の王の後裔が「県主」に任命されている事実の多いことや、青銅器等の出土など、文献と考古学の両面からして、「末盧国」以外に基山町と鳥栖市を中心とした基肆国、三養基郡上峰村と神埼郡東背振村・三田川町を中心とした三根国、大和町を中心とした佐嘉国、杵島郡北方町を中心とした杵島国の五つの原始的小国家の存在が推定されている。この中で考古学の面から見ると、末盧国と三根国が強大であったとされる。

大和町を中心存在したと推定される佐嘉国については、八世紀に編纂された「肥前風土記」の佐嘉

古 代



船 塚

郡の条に

「此の川上に荒神有り 往来之人半生半殺 茲に於いて県主等祖大荒田占わり」

とあって、佐嘉国の首長であつた大荒田は祭祀権者として臨んでいたことを伝えている。又考古学上から見ると、弥生時代遺跡の尼寺南小路の支石墓が先ずあげられ、又その至近な距離から青銅器遺物としての広形銅戈や約三キロ南の高木瀬町上高木出土の広形銅鉾等が、その存在を物語るものではないだろうか。